

〈研究ノート〉

幼児向け昔話の特徴について — 原典との比較 —

石井 悠加

(2017年9月15日受理)

要 旨

保育者は幼児と「昔話」との出会いにおいて重要な役割を果たす。大学の国語教育は、保育者をめざす学生のために何を提示できるか。

周知度の最も高い昔話の一つ「浦島太郎」を一例とすれば、アンケートにて多くの学生が絵を伴った出版物を介して「浦島太郎」に出会ったと回答し、さらに浦島太郎の性格については、相反する印象を併せ持っている。なぜなら本来は幼児向けに作られた物語ではないがために、教訓譚としては不条理な結末を迎えるためである。この矛盾を絵本の表現は統合しようとする。中世には既に絵巻『浦島明神縁起絵』があるが、昭和40年代に登場した「アニメ絵本」が定型化した昔話に新たな劇的要素がもたらすなど、絵が物語の内容に影響を及ぼしている。また2016年に浦島太郎の恋心を歌うCMソングが幅広い人気を博したことも、今後の浦島太郎のイメージの再形成に影響を与えるだろう。

幼児が豊かな想像力で絵本を楽しみ、変容し続ける「昔話」に出会う時、保育者は「絵本の外側」について学び考える習慣を持つことで、物語の提示者としての自信を得ることができるだろう。

キーワード 浦島太郎、絵本、読み聞かせ、昔話、CMソング

はじめに

「幼児向け」昔話には、どのような特徴があるか。文字の読めない幼児を対象としているということは、つまりその理解のために絵画と音声が用いられること、絵本の挿絵や動画のヴィジュアルと、読み聞かせをする大人自身の解釈を介しているという特徴を持つ。読み聞かせをする大人とは、専門的に学んだ保育者か、または訓練を受けていない一般の成人である。保育者を目指す学生は、幼児と絵本の間で自身がどのような役割を果たすことが可能かを考えるべきだろう。またそこに役立てるものを大学での国語教育は提示しなくてはならない。本稿は定番の昔話の中で最も歴史が古く、広く伝承されており、また最も話者の物語解釈が問われる「浦島太郎」を題材として、原典との比較により、この問題に対する提案を行うものである。

1. 昔話のメディア展開と周知度

株式会社KDDIの携帯電話ブランド「au」が、2015年1月から開始したコマーシャルシリーズ「三太郎」は、「みんながみんな英雄」をキャッチフレーズに、桃太郎、浦島太郎、金太郎をメインに、かぐや姫、乙姫、鬼などの昔話の登場人物を配置する人気シリーズである。2017年7月現在、このシリーズの動画計90作がインターネット公開されている。

たしかに日本で幼少期を送ったどの世代の人々にとっても、これらの登場人物は馴染み深い。多くの人が家庭やそのほかの場所で、絵本や紙芝居など、何かしらの形でこれらの昔話に接している。書店の児童書コーナーには、子どもが扱いやすい大きさで、厚紙にフルカラーで印刷されたシリーズが常備されており、廉価で入手できる。2007年には、宇宙航空研究開発機構から「おきな」「おうな」の子衛星を擁する、日本初的大型月探査機「かぐや」が打ち上げられた。現代の日本でこれらの昔話に接する機会、これらの昔話の幅広い知識共有を前提とした商業表現の例は、枚挙に暇がない。

2017年4月、本学のこども学科1年生に在籍する学生のうち51名の協力を得て、「昔話」に関する記憶についてアンケートを行った。昔話各話について、「詳しく知っている」をA、「全体のあらすじを知っている」をB、「少しだけどんな話か知っている」をC、「どんな話か全く知らない」をDとして選択する形式の問いかけに対して、「桃太郎」はA37名、B14名、C0名、D0名、「かぐや姫（竹取物語）」はA21名、B16名、C14名、D0名、「浦島太郎」はA17名、B26名、C8名、D0名、「金太郎」はA6名、D8名、C32名、D5名であった。つまり対象者にとって最も馴染み深いのは「桃太郎」であり、ついで「かぐや姫」「浦島太郎」「金太郎」と続く。そして「金太郎」を除く3つの昔話については、物語の内容を全く知らない者はいなかった。

さて、保育段階における教育と小学校教育との連携を視野に入れた時、保育者を目指す学生にとって、絵本の読み聞かせについて学ぶことは重要である。

文部科学省『幼稚園教育要領』は、言葉の獲得に関する領域「言葉」の中で、「絵本や物語などに親しむこと」について、ねらいを「先生や友達と心を通わせる」こと、内容を、「興味をもって聞き、創造をする楽しさを味わう」こととしている。その扱いは、「絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること」としている。そして『小学校学習指導要領』では、第1学年及び第2学年には「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を、第3学年及び第4学年では、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすることや、長い間使われてきたことわざや慣用語、故事成語などの意味を知り、使うこと」を、第5学年及び第6学年では、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読することや、古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること」を定めている。

「小学校学習指導要領解説」が第1・2学年の教材とするのは「昔話や神話・伝承」であり、具体的に挙げられている作品は『古事記』『日本書紀』『風土記』、その他「地域に伝わる伝説」

だった。すると、幼少連携を意識した場合、それらを幼児向けに書き直した「昔話」の世界へと親しむ体験が、幼年期の子どもたちにとって必要となるだろう。

ここで問題としたいのは、子どもたちを「昔話」の世界へと導く、保育者の側の理解の在り方である。小学校教育との連携を可能とするために、保育者を目指す学生には、絵本などを介して知った「昔話」の来歴を意識する機会が必要である。

『風土記』や『万葉集』など上代に遡る典拠を持ち、しかも現代日本においても知名度の高い「浦島太郎」を取り上げて試考してみたい。

2. 「浦島太郎」原典の受容史

「浦島太郎」の原典とは何か。浦島太郎の物語の起源については、三浦佑之『浦島太郎の文学史 恋愛小説の発生』（五柳書院、平一）、林晃平『浦島伝説の研究』（おうふう、平一三）など、既にあらゆる先学による指摘がある。『万葉集』巻九の高橋虫麻呂歌の「詠水江浦嶋子一首并短歌」、『日本書紀』雄略天皇二十二年七月条の「水江浦嶋子」、『丹後国風土記逸文』の「浦嶋子」の伝承などが、浦島太郎の物語の最も古い典拠である。これら3つでは、中国の神仙思想の影響を受けており、浦嶋子が女と出会い、仙境で日常と隔絶した時間を過ごす点が共通する。高橋虫麻呂詠と『丹後国風土記逸文』では、開けてはいけない箱や、老人となる結末までもが共通している。しかし「浦島太郎」の名や、亀に乗る浦島太郎のイメージなどの現代の私達の常識は、『御伽草子』刊行後に形成されたものである。

また、絵によって浦嶋伝説を表現する例としては、挿絵入りの「御伽草子」以前に、京都浦島神社所蔵の『浦島明神縁起絵』が、浦島伝説を描いた現存最古の絵巻として注目される。これは梅津次郎監修『絵巻物総覧』（角川書店、平四）によれば、南北朝末期（宮次男）の制作と推定されるという。物語の内容を説明する詞書は別にあったものとされ、現在は絵のみの卷子本の姿であるが、巻末の浦島明神祭礼の様子その他は、「御伽草子」の浦島太郎の内容に一致する部分が多い。ここでは、浦嶋子が導かれる世界は中国風に表現される。玉手箱を携えて浜辺に佇む中国風の服装の人物や、浜辺で玉手箱を開き、煙を浴びて老人になる主人公の姿がある。この女性に「乙姫」という名がつけられるのも『御伽草子』以降である。林晃平氏は前掲書において、浦島伝説における最も大きなメディアの変革が訪れたのが明治初期であり、明治29年の活版印刷による巖谷小波の「日本昔噺」で広まったこと、明治37年以降の国定教科書の教材に採用されたことによって、画一・固定化されたこと、さらに明治44年に刊行された文部省唱歌の「浦島太郎」が、浦島伝説のイメージを既定する決定打となったことを指摘している。

また、浦島伝説の媒体となるのは文字作品だけではない。『丹後国風土記逸文』の舞台である旧丹後国、今の京都府与謝郡の浦嶋神社のほか、浦島伝承は日本の沿岸部各地で認められるという。「桃太郎」や「金太郎」とはちがひ、無名の漁師が主人公であり、海亀の確認される浜辺も各地にあるためだろう。高橋大輔『浦島太郎はどこへ行ったのか』（新潮社、平一七）は、各地に残る伝承から浦島太郎の実像を探ろうとしたルポルタージュである。

しかし前出のアンケートの対象となった学生の大半が東京都、埼玉県などで幼少期を送っ

ている。「『浦島太郎』のおはなしを、あなたは何で知りましたか。(複数回答可)」という質問に対して、有効回答50名中、「童謡」で知ったと答えたのは5名、「絵本」は30名、「紙しばい」は10名、「演劇」は0名、「アニメ・ビデオ」は4名、その他「母親の素話で」と答えた者が1名だった。本学で保育者を目指す学生にとって、浦島伝説は地域の伝承ではなく、基本的に「絵」を伴う出版物を介して知るものである。地域に伝承として伝わっている場合には、また別のアプローチがあるだろう。

3. 保育者の理解

前掲の通り、「浦島太郎」の物語を「詳しく知っている」と答えた学生は、51名中17名だった。同時に「あなたの記憶している『浦島太郎』のおはなしの終わり方はどんなものだったか、簡単に説明してください。」という質問を行った。41名が、「おじいさんになった」と結末を説明している。その他、5名が未記入、5名が「玉手箱を見つける」「浦島太郎がとほうにくれる」など部分的に説明した。またさらに詳しく、「(玉手)箱」や「宝箱」「箱」などの語を使用して説明した学生は30名、「乙姫」ということばを使用した学生も2名いた。

そして、浦島太郎の性格について「『浦島太郎』の主人公について、あなたはどんな性格の人物だと思いましたか。」という質問に対する自由記述の有効解答数は40だった。そのうち、「やさしい」という語を用いて説明した学生がのべ30名と圧倒的である。これはいじめられている亀を助けたこと評価している。同様に、「勇敢」「正義感がある」など、亀をいじめる子ども達を諷めたことへの評価はのべ5名いた。その他の表現を含む回答11は以下の通りである。

- A 「良い人だけど開けちゃいけない箱をあけたのはバカだなと思った」
- B 「やさしくてバカ」 C 「やさしくのんびり、多分あまり頭は良くない」
- D 「やさしい&欲があった」 E 「欲深い」 F 「物欲がとてもある人」
- G 「外づらが良い」 H 「そこそこ人間ができている人」 I 「せっかち」
- J 「ちょっとバカ」 K 「自由な人」

D、E、Fの回答が浦島太郎を欲深いと答えているのは、「玉手箱」に関する誤読だろうか。

注目したいのは、「やさしい」などのポジティブな評価に、「バカ」などのネガティブな評価を組み合わせたA、B、C、Dのような回答が出たことである。幼児は、「困っている人を助ける」ことは良いことであり、「約束を破る」「言いつけを聞かない」ことは間違っただけのことだとしつけられる。そのためこれらの4人の回答者は、物語の前半・後半の浦島太郎に対して、幼児期の感想を別個に述べたものと推測される。昔話というものに対する、保育者を目指し始めた10代の率直な感想として、留意すべきである。物語の冒頭で「優しい」と読者に思わせる主人公を登場させながら、「めでたしめでたし」の結末を迎えない。本来幼児向けに作られた物語ではないがために、通常の報恩説話の枠に不条理な結末を迎えるという特徴が、「浦島太郎」の物語を変容させる一つの原動力となっていく。

4. 幼児向け絵本の「浦島太郎」

幼児向け絵本として版を重ねるうち、「浦島太郎」には、矛盾を統合し、教訓を盛り込もうという意図が盛り込まれていく。「浦島太郎」の抱える不条理が、絵本の表現の変遷によって統合されていく過程を追っていこう。

「浦島太郎」の絵本は、多くの場合、幼い子どもの読者を想定した「お伽噺」「昔話」絵本のシリーズの一冊として刊行されている。近代以降に刊行されたそれらの無数のシリーズを網羅することはできないが、今後の研究の目安となることを目指して、国際子ども図書館が所蔵する『浦島太郎』絵本を刊行年順に閲覧した中から、幼児向けの浦島太郎の絵本の変遷の指標となるものを、物語の不条理の統合という点に注目して以下に取り上げる。

まず、昭和4年にコドモブックから出版された金井直三画・作「ウラシマタラウ」である。フルカラーで彩色されたこの本は、文部省唱歌の「浦島太郎」を七五調・口語体の文体に書き換えたような最も簡素な内容で、最後は「カヘツテミレバイヘモナク ミンナシラナイヒトバカリ カナシクナツタウラシマハ ナニガアラウトタマテバコ アケレバシロイケムガデテ シラガノヂヂトナリマシタ」と結ばれる。ページ数も少ないが、英語の学習効果を意図して、紙面の隅には関連する英単語が書かれている。童話や童謡を幼児の英語教育の教材とする例がここに早くも見られる。

その後、一つの大きな転換点となったのが、いわゆる「アニメ絵本」の登場である。「アニメ絵本」をここで仮に最低限、「実際の放映の有無を問わず、アニメーションのセル画・背景画風の挿絵を持つ絵本」と定義する。国会図書館の蔵書の中で最も早い「浦島太郎」のアニメ絵本の例は、昭和49年にポプラ社から出版された『日本むかしばなし うらしまたろう』（画：井上智・ムツゴロウプロ、制作：ひろみプロ）である。このシリーズは全10冊で、『さるかにばなし』、『ぶんぶくちゃがま』、『ももたろう』、『こぶとりじいさん』、『かちかちやま』、『三ねんねたろう』、『いっすんぼうし』、『したきりすずめ』、『はなさかじいさん』など、所収話は典型的な昔話である。

アニメ絵本が一般の絵本と異なるのは、物語をまるでテレビアニメを視聴して味わっているかのような動的な展開を持っている点である。そのためこの絵本は浦島太郎を題材としたものとしては異例の全31ページからなり、物語の展開を最も劇的に読者に提示したものになっている。例えばこの絵本の最初の地上での場面では、浦島太郎の家は貧しく、父親の姿がない。そして母親は年老いた姿で描かれ、亀を救うために安からぬ代価を払って帰った息子を咎めず褒めるといった場面まで作られている。これは後に、謎めいた美女達に囲まれて、現実を忘れて夢に溺れることになる浦島太郎にとって、地上への帰還を望む動機を作るための伏線である。そして浦島太郎が母親とつましく暮らしたこの住まいが、後に朽ち果てた姿で再び描かれることは、母の死とともに、帰還した浦島太郎の衝撃をより大きく読者に感じとらせる効果をもっている。アニメ絵本、そしてそのもととなったアニメという媒体は、絵に特徴があるだけでなく、このように定型化した「昔話」に劇的要素をもたらす工夫がされている。幼児向け昔話と原典を比較する上で、今後より注目されるべき媒体だろう。

また、幼児向け童話の媒体として、もう一つ注目したいのが、廉価で小型に作られた、名

作絵本のシリーズである。これらは複数の書店から刊行されているが、国際こども図書館の所蔵中、『浦島太郎』を含む最も早いシリーズは、1990年に講談社から出版された、「まんが日本昔ばなし」（ぼるぼっくす構成）である。1999年に同社から、2005年に二見書房から再版が出版されている。この「まんが日本昔ばなし」シリーズは、絵柄の可愛らしさが特徴で、その特徴が従来になかった展開を生み出している。「まんが」と冠する通り、浦島太郎をかわいらしい二等身のマスコットとして描いている。その絵柄の可愛らしさは、浦島太郎の性格づけに影響しており、海の世界にはしゃぎ、乙姫に照れてしまい、地上の花を恋しがる、幼く夢見がちな新しい浦島太郎像を読者に提示している。その結果、乙姫が玉手箱を渡す理由と、物語の結末には大きな変化が生じている。乙姫は「こまったことがあったら、このたまてばこをあけるのですよ。」と玉手箱を開けることを示唆し、地上に帰還して年月の経過を知った浦島太郎は、乙姫の言いつけ通りに玉手箱を開ける。すると雲のような白い髭が生えて、「いつのまにか、たろうはふわふわ空をただよっていました。／たろうには、うつくしい海のそこのせかいがゆめなのか、このせかいがゆめなのか、よくわからなくなってしまいました。」という異色の結末を迎えるのである。これは幼児向けを意識して絵柄の可愛らしさを重視することが、物語を原典から乖離させることを示す好例である。

同じ時期に出版された『アニメむかしむかし絵本 うらしまたろう』文：西本鶏介、絵・高橋信也（ポプラ社、1991）は、文部省唱歌に準じた典型的な展開だが、『ムーミン』『アルプスの少女ハイジ』などを手掛けたイラストレーターが絵を担当し、文を民話研究、児童文学研究の専門家が手がけた上、浦島太郎に関する古典作品を紹介した解説文を掲載した絵本である。当時テレビアニメを視聴していた子ども達にとって馴染みやすい絵であり、解説文を載せることで、古典学習への導入の役割も果たす絵本である。幼児から読める物語本編と、高学年の児童や保護者向けの解説文を併せた絵本が出版されるようになっている。古典教育の教材として昔話を利用する視点であり、保育者にとっても有用だろう。

最後に、幼児向けの「浦島太郎」が、原典へと回帰した例を取り上げたい。『日本昔ばなしアニメ絵本12 うらしまたろう』（永岡書店、1997）は、小型ながら、見開き23頁、つまり23の場面展開を持つ絵本であり、初版から10年経った2017年現在も書店で購入できる、人気シリーズの一冊である。ここでは、従来の典型的な幼児向けの「浦島太郎」の筋立てに御伽草子版の「浦島太郎」の要素を大きく加えた上、さらに改変を加えている。竜宮は四方四季の御殿として描かれ、地上に帰った浦島太郎は、玉手箱を開けてしまうものの、最後は鶴に身を変えて、本来亀であった乙姫と末永く幸せに暮らす。御伽草子の結末を採用したことで、『シンデレラ』や『白雪姫』のような、幸福な恋愛物語として「浦島太郎」を幼児に提示することに成功している。『御伽草子』自体は、児童向けに書き直され、数多く出版されている。しかし解説文を載せずに幼児向けの「浦島太郎」に取り入れ、普及させている点に、今後の影響を注目したい。なお、本書の初版は1997年だが、前出のアンケートにおいては、老人になった浦島太郎のその後について言及した回答は見られなかった。

5. CMソングの「浦島太郎」

幼児に影響をもたらすのは、幼児向け昔話だけではない。本稿冒頭に取り上げたCMシリーズの中で、2016年、俳優桐谷健太の演じる浦島太郎が、沖縄の伝統楽器三線を爪弾きながら「海の声」（島袋優作曲、篠原誠作詞）を歌う姿が放映された。その直後の人気を経て2017年現在も、音楽配信・カラオケともに国内の幅広い世代で人気という。「島唄」（1993年、THE BOOM作詞・作曲）、「なだそうそう」（2000年、BEGIN作曲、夏川りみ作詞）などの、沖縄民謡をベースとするポップソングの人気の系譜に列なるものだろう。この楽曲で注目したいのは、それが恋の歌になっているという点である。浜辺に座り、「たとえ僕がおじいさんになっても」と歌い上げる浦島太郎は、波の彼方にいる乙姫に恋をする青年として描かれている。このような浦島太郎が乙姫に恋愛感情を持つ描写は、幼児・児童向けの絵本の中の「浦島太郎」には含まれない。むしろ『丹後国風土記逸文』の水江浦嶋子の設定に近く、「浦島伝説」の原典に遡るものである。

常世べに 雲たちわたる 水の江の 浦嶋の子が 言持ちわたる

秋本吉郎校注『日本古典文学大系2 風土記』（岩波書店、1958年）

立岡裕士氏は「児童向けに再話された古風土記の特徴：子どもはどのような風土記を与えられたか」（『兵庫教育大学教育実践学論集』18、2017.3）での調査において、1946年から1975年の戦後30年の間に児童向けに刊行され、再話された風土記説話が多いことを指摘されている。上記の浦嶋子の歌の訳の一例として、『少年少女世界の名作文学45 日本編1』（小学館、1966）の訳を引用する。

雲が流れていくよ／亀姫の住む国のほうへ／水の江の浦島の子の／悲しい思いが／
雲となって／ああ 流れていくよ

かつて児童向けに再話されていた『風土記』の場合、このように、地上に帰還した後の主人公の悲しみや乙姫への恋心の表現があった。しかしそれは小学生以上を対象として、「文学」として紹介されるものだった。一方、「海の声」と一連のCMシリーズは、広く乙姫に恋する浦島太郎像、そしてそれがいつかは成就するであろうという予想を、年齢を問わず無数の人に抱かせる。浦島伝説のイメージに今後与えていく影響は看過できないだろう。

国定教科書や童謡に代わり、典拠や心情読解を新たにした絵本やCMが、浦島太郎のイメージを再形成していく。そうした中で、保育者がより豊かな昔話の語り手となり、小学校教育に結びつく古典世界の体験を幼児にもたらすには、自分の記憶する「昔話」がどのような典拠を持ち、共有の過程で改変されたものなのかを自覚することが重要である。

おわりに

「浦島太郎」を小学校の古典教育に利用する提案をするのは、青山由紀ら編、工藤直子ら監修『光村の国語 わかる、伝わる、古典のこころ 第1巻 物語・随筆・説話・伝統芸能を楽しむ16のアイデア』（光村教育図書、2009）である。浦島太郎が玉手箱を開けて老人になり、やがて鶴となり、亀姫と暮らすという『御伽草子』の「浦島太郎」を、原文と現代語訳を照らし合わせながら読む取り組みで、主人公の心情を想像させる、結末の検討をさせるなどの授業案を提示している。

「浦島太郎」像はメディアの中で今後また変化していくだろう。いきいきと絵本の読み聞かせをするために、保育者のための「昔話」教育の提案をしたい。昔話をただ読み流し、手にした絵本の再生装置になるのではなく、また、ことさらに教訓に特化した読みを進めるのでもない物語の提示者になるにはどうすべきか。子どもたちが豊かな想像力をもって昔話にふれた時に生まれる疑問に対して、例えば「実はこのお話には続きがあるんだよ」と、子どもたちに絵本の外側があることを知らせることもできれば、それは保育者を目指す学生に対して、物語の提示者としての自覚・自信を養うことに繋がるだろう。

私達は何を与えられてきたのか、何を与えているのか、近年の「食育」の取り組みのように、物語についても考える習慣をつけることを、保育者を目指す学生のために提言したい。